

愛によって互いに仕えなさい。

奨励	三木　メイ〔みき・めい〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。

（ガラテヤの信徒への手紙　５章１３—１４節）

知ることに意欲をもてる時

いよいよ今日から秋学期の授業が始まります。学生の皆さんは夏休みの間、ゆっくりと充実した日々を満喫できたでしょうか。新たに勉強を始めることができる学期始めのこの日に、新たな勉強への意欲を燃やして、勉学の秋を十分に堪能できるよう心の準備をしていきましょう。今はどうですか。あなたの胸のなかには、学ぶ意欲は湧いてきているでしょうか、いないでしょうか。

学ぶこと、知ることに意欲をもつとき、もてるときというのは、どういう心の状態になっているのでしょうか。自分はこれについて知りたい、こういうことを学びたいという熱い気持ちをもって、知りたいことを探し求め続けて、やっと知ることができたときには喜びや驚きが湧き起こってくる。そして、自分の世界が少し広がったような嬉しい気分になれるとしたら、もっとも知りたい、学びたいという気持ちが出てくるでしょう。人間は誰でも、いつの時代でも、そういうふうに真理を「知る」ことを探し求めていく性質をもっていると言えるのではないかと思います。その知への探求が、さまざまな文化や宗教を生み出し、あらゆる分野の学問、科学技術の発展にもつながっていくのだと思います。

しかし、私たちそして皆さんも経験しているのは、勉強なんかしたくないという気分になることが多い、ということではないでしょうか。学び、知るということは、いつも喜びや驚きや嬉しさを伴うものではないからです。もし、これを学ぶこと、知ることに深い意味がある、と自分がしっかり信じていければ、勉強へのやる気をもっと長く維持できるでしょう。でも、こんな勉強が何の役に立つのだろう、意味があるのだろうかと思うこともしばしばあるでしょう。この勉強は自分にとっては意味がないと思ってしまうと、途端にやる気がなくなってしまう。それに、学ぶべき知識が多すぎるとか、真理の探求に時間と手間がかかるとなると、どうしても忍耐と努力が必要になってきます。その苦しみを乗り越えるほどに意味の深さを信じていけるかどうか、そこがカギになってきます。

真理を探求すること

「真理を探求する」ということは、その真理の意味を信じることであり愛することだ、と語った人がいます。意味を信じるということは、まだ確かな証拠をつかんでいなくても、とにかくきつと意味があるに違いないという信念、信頼をもつということです。それは人間関係においてもそうなのですが、誰かとの間に愛と信頼があれば、さまざまな苦しみが襲ってきても、なんとか乗り越えられるのではないのでしょうか。何か一つのことを研究し続けている研究者（例えばノーベル賞受賞者など）や、ある一つのものを作り続けてその技を極めている職人の方などを思い起こしてみてください。さまざまな苦しい思いや困難な問題があっても、その研究や仕事をすることを心から愛している人、その意味を信じている人たちではないでしょうか。

日本のなかでは「宗教」という分野そのものに距離感を感じている人が多いと思いますが、「宗教」は人間が生きているということに意味があると信じた人びとが、どうしたらその意味を全うして生きていけるのか、という真理を探求するなかから生まれた文化現象の一つなのです。キリスト教もその宗教の一つです。人間に生きる意味をもたらす「真理」を探求し、愛してきた人びとの信念が数千年以上にわたって伝承され、記されたのが、聖書（旧約、新約）なのです。

この秋学期の始まりにあたって、自分がどういう知の探求の道を信じて歩もうとして大学に来たか、ということをお願いいたします。そして、チャペル・アワーでは聖書の言葉からメッセージを語っていきますが、それは「生きる」ということを大切に考える、「生きる」ことを愛するのための知の探求の道の一つだと思って、聞いていただくと嬉しいと思います。

使徒パウロの真理探求の道

さて、今日の「愛によって互いに仕えなさい」という聖書の言葉についてのお話に入りましょう。これはいつごろ、誰が、誰に対して、何のために語ったのか、まずそれを知っておくことが大切です。このガラテヤの信徒への手紙は、紀元１世紀中ごろから１世紀末ごろの時代に、使徒パウロが、現在のトルコ辺りの地域にあったと思われる教会の人びとに宛てて書いたものだろうと言われています。パウロは、地中海沿岸を巡りながらキリスト教の伝道活動を行っていた人ですが、彼は命をかけて一生懸命「真理」を探求した人間の一人だったと言っていると思います。しかし、彼の歩んだ道は一本道ではありませんでした。彼は元ユダヤ教徒で、ユダヤの律法を熱心に勉強していた人です。神から真の救いを授かるために、という律法を守らねばならないか、それを厳しく守ることの意味を信じていた人です。そして、その律法主義的な考えをもって、キリスト教徒を迫害していた人でした。

ところが彼は、イエスが十字架につけられて亡くなった後に、復活のキリストに出会って１８０度転換して、「イエスこそ神の子、救い主」と信じるキリスト者となったのです。新約聖書の使徒言行録９章にはそのエピソードがドラマチックに描かれています。どうしてそうなったのか不思議ですが、おそらくそれは、彼が心と頭のなかで真理の探求をずっと続けていたからでしょう。そして彼は、新たに見つけた真理であるキリストの福音を、ローマ帝国のあらゆる地域に旅をしながら宣べ伝えることに後の半生を捧げました。

パウロからのメッセージ

このパウロの話を聞いてキリスト者になったガラテヤの教会の人びとに、改めて何を大切にして生きていくべきかを教え導くためにこの手紙が書かれました。そしてこの手紙は、彼がなぜユダヤ教の律法ではなく、キリストの福音を真理としたのか、その考え、信念、神学思想が書かれている重要な箇所を含んでいるのです。少し聖書をご覧ください。

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しっかりしなさい。奴隷の轡に二度とつながれてはなりません」（ガラテヤの信徒への手紙５章１節）。

ここで「奴隷」と言っているのは、実際の奴隷制度のなかの奴隷ということではなくて、ユダヤ教の律法主義的な考えに縛られた生き方自体のことを指しています。律法には、神の救いの契約を受け継ぐ者として守るべき掟が詳細に記されていました。例えば食物規定では食べてはいけない食物は何か、清めの規定ではこうやって汚れを受けないようにしなさいとか、神への犠牲の献げものはいつ何を献げるとか。信仰生活を送るにあたって、神に対して守るべき具体的な行動が示されていて、それを守らなくてはいけないのだということを強調したのが、この律法主義的な考え方です。以前はパウロもこの律法主義的な考え方にとらわれていました。だから、これに再び縛られてはいけない、と言っているのです。なぜなら、キリストがこの「奴隷の轡」から解放して自由にしてくださったのだから、とパウロは書いています。

当時は、パウロのようにユダヤ教からキリスト教徒になった人がある程度多くいたのでしょう。イエスもユダヤ教徒でしたし、いわばユダヤ教とキリスト教の違いが今ほどはっきりしていなかった時代に、どういふに信仰生活をしていけばいいかと考えるときの基礎となるべきキリスト教神学思想が、まだ明確になっていなかったころです。その状況のなかで、神からの救いの契約を受け継ぐ者として、ユダヤ教の律法に従いキリスト者も割礼を受けるべきだと考える人がいました。パウロは手紙でそれを否定しているのです。

そして５章６節をご覧ください。「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」とパウロは書いています。「愛の実践」というのは何らかの行動をすることですが、まず「愛する」という主体的な心の在り方が大切であって、そこからどんな行動をとるかということは、一人ひとりの「自由」に任されているのです。この「愛の実践」が何かということは、イエス・キリストの行動と言葉に凝縮されているから、それを知っているあなたがたは分かるでしょ、というわけです。

５章７節「あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いったいだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか」。これは、教会の人びとに対して、キリストの福音の真理を探求して走っていたはずのあなたがたが、誰かの言葉や何かのきっかけで大切な真理を見失っているのではないかと、と懸念していることが分かります。だからもう一度一番大切な教えの言葉として「愛によって互いに仕えなさい」と言い、続けて「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」と繰り返し伝えています。この言葉は、ユダヤ教もキリスト教も、どちらも同様に大切な真理だと認めているのです。律法主義的に、あれをしなればいけないのだ、そうしなければ神に赦されないのだ、という考え方に縛られないで、「愛する」ことをまず大切にしましょう、と語りかけています。しかし「愛」とは何か、が分かりにくいですね。

「花子とアン」の物語

これまでお話ししてきたことを、ある人の生涯を描いたドラマを思い出しながら振り返ってみたいと思います。それは、今年９月下旬まで続いていたNHK朝の連続テレビ小説のドラマ「花子とアン」です。村岡花子という人は、L・M・モンゴメリの『赤毛のアン』を最初に翻訳した実在の女性で、彼女はクリスチャンです。彼女の生涯を描いた『アン』のゆりかごー村岡花子の生涯（村岡恵理　新潮社　２０１１年）という本を基にして、脚本家・中国ミホ氏によって脚色されたドラマです。皆さんはご覧になっていたでしょうか。ドラマはフィクション・ストーリーで史実とは異なりますが、この物語を少し紹介します。

主人公の花子は貧しい農家に生まれました。人一倍、本が大好きで、本を読んだり、学んだりすることが大好きな女の子だったと描かれています。今は違って、家の外から情報を得たり、本を手に入れることは田舎の子どもにとっては困難な時代でした。しかし、花子はごはんを食べるの忘れるぐらい本を夢中になって読みます。とても素朴に、真理を探し求める心をもった子どもの姿が描かれています。新しいことを知る喜びは、皆さんの子ども時代にもあったのではないのでしょうか。

彼女は修和女学校（実際は東洋英和女学校）に給費生として入学します。そこで初めて英語の本に出会うのです。「何だこれ、全く読めない」。他の人はすでに勉強して分かるのに、自分は全く分からないので、最初は英語が苦手だった花子。しかし、少しずつ勉強して、女性の宣教師の先生との交流によって英語に親しむようになり、だんだん英語の勉強に夢中になって、学ぶ喜びに心奪われるようになっていきます。そして、最後にはそれが彼女に生きる意味を与えてくれる大切な真理になっていきます。つまり、英語を学び、英語で書かれた素晴らしい物語を翻訳して、日本の多くの人びと、特に子どもたちに知らせる仕事をしていくことに、彼女は自分の生涯を捧げていくようになるのです。

腹心の友との愛と信頼

もう一つ注目したいのは、友人との関係です。蓮子という花子と腹心の友となった女性が登場してきます。元々、花子と蓮子は、身分も、年齢も、生活レベルも違う、価値観も知識量も違うので、最初はちぐはぐな出会いだったのですが、いろいろな喜びも悲しみも共にするような経験を通して、腹心の友となります。

しかし、その後でこの二人は、立場の違いからけんかして長く会わなくなります。特に戦争中に花子がラジオで子どもたちに軍国主義的な語りをさせられていたことがあり、息子を戦争で失った蓮子が怒って花子と長い間絶縁していたことがあります。戦時中というのは、皆がお国のためにこうするのが正しいのだ、男の子は兵士として戦場に行ってお国のために死ぬのが一番素晴らしい生き方なのだ、と教え込まれた時代です。そして、その息子を見送ってお国を守るのが母の務めなのだ、そうでない者は非国民と言われました。こういう考え方は、さきほどお話しした律法主義的な考え方と似ているのではないかと、思います。

宗教に限らず、人が生きていくなかで、こうすることが絶対正しいことで、そうでないことは絶対許されないことなのだ、という考え方に縛られてしまう、ということは時代の流れによって、また個人の性格によって、しばしば起こってくるのだらうと思います。それはパウロの手紙にあった「奴隷の轡」と同じではないでしょうか。しかし、友人の悲しみと苦しみを感じたとき、例えば、花子が息子を失ったときの悲しみを思っ

おわりに

若い学生の皆さん、何が大切な真理として自分のなかにあるのか、あるいはないのか、それをどうやって尋ね求めていくのか、それを考えて自ら求めていってほしいと思います。それと同時に、人間同士の関係のなかで、本当に愛と信頼をもって関係を取り結ぶことができる仲間、友人、家族をもって、そういう交わりができる人になってほしいですし、それを探し求めていく心をいつも大切にもってほしいと思います。それが皆さんの人生を真実に豊かなものとし、意味あるものにしてくれると思います。聖書はそのことを語り伝えているのです。

2014年10月1日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録